

生涯教育専攻 平成 2 0 年度卒業論文要旨

井尻 和孝

「地域資料館の現状と可能性」

卒論では、坂出市と塩について塩業の関わりについて調べ、坂出市がなぜ塩業によって発展してきたのか、製塩法の種類、歴史などを研究し、当時の人たちの生活の中でどのような存在であったのか研究を行なった。そして現在、塩業資料館では、当時の人たちの労働や生活をどのように展示し、伝えているのか、塩業によって発展してきたことを知らない世代の人たちに資料館はどのようにして伝え、機能しなければならないのかを考察した。坂出市教育委員会の方は「塩田を知らない世代、これからの時代に向けて、発信していくことができる施設である」と述べているが、市民に対する働きかけの意識が乏しいと感じた。資料館を利用して市民に対する授業が行なわれていない。また、学校と連携しての授業も行なわれていない。資料館が市民にたいして積極的に働きかけを行なっていかなければならない。例えば、スタッフが学校に出張し、歴史を伝え、疑問を投げかけることにより、それを学習として昇華していく働きかけが必要である。また、公民館や図書館などのスペースを利用して展示などを行なう働きかけも必要である。このような働きかけを行なことで坂出市と歴史を身近に感じてもらうことが出来、自らの地域のことを学習し、考え直す機会となり、意識が深まるのではないかと。

(指導担当 岡田)

和田 健佑

「映倫・マスコミと世論との長い付き合い」

映倫とは、映画・予告編・ポスターの審査や青少年に対しての規制を行う、といったことが主とした活動の組織である。本研究では、この映倫が現在の形になるまでに歩んできた道のりを元に各時代の映画とそれに対応した映倫の動き・世論とマスコミの動向を受けた政府の行動を見て、現在の映画の規制が妥当なものであるかということや、これからの映倫についてのことを研究目的とした。

大正時代から終戦まで続いた国家検閲・第二次世界大戦後に従来の日本政府が解体されようやく自由になったと思ったのもつかのま、GHQ による新しい検閲が始まった。その後、ようやく現在の映倫が誕生したのである。しかし、現在の多様化した映画の内容に対する判断の難しさ・基準は時代の流れに反映されることなど問題点も上がっている。このような問題が上がっていることが、映画というメディアの影響の大きさを示すと共に、映画の持つ魅力の大きさなのだろう。ただ映画を見ているだけであった私も本論を書く過程で映倫の活動を見て、その重大さを知った。

(指導担当 石飛)

稲葉 祥太

「時代に沿った弓道のスタイル・思想の考察」

私は高校の時から今まで弓道を続けてきている。弓道というものはその時代によって形を変えその結果として今のような形になった。それはつまりこれからも弓道は時代の流れに沿って変化していくものであるということが出来る。だから私は時代に沿った弓道のスタイル・思想についてこの論文で考えていくことにした。

この論文を書くことを通じて再認識したことといえば、弓道はその時代やその流れによって変化し人々と共に変わっていったということ、弓道は心身ともに鍛えるものであり、礼を学びそれを通じて内面を育てるものであるというようなことなどが挙げられる。更に今の弓道はスポーツ性が強くなり、国際化が進んできており、いわばスポーツ弓道になっていることなども新たに感じる事ができた。

このような中、これからの弓道というものはスポーツ弓道であっても武道の精神を忘れずに取り組んでいかなければならない。また私自身そうあってほしいと思っている。

(指導担当 岡田)

井上 卓也

「高齢者から学ぶ生涯スポーツ～箕面市における卓球クラブの調査をもとに～」

本研究の動機は地元箕面市の卓球クラブに所属している高齢者の人たちがなぜ高齢者になってもスポーツを続けているのかについて知りたいと思ったことである。そこで私は、箕面市のクラブチームに所属している高齢者の人たちにアンケートをとり、卓球にとりくむ目的や意識について考察した。

調査をした高齢者の意識については、「卓球が生活の一部になっている」「仲間づくり」「技術向上」「ストレス解消」という4つのタイプがあることが分かった。もちろんスポーツをするうえで特定のタイプのみが価値を持つということではなく、それぞれのタイプが、活動の中で自分の思いを大切に、その人の人生にとってスポーツを有益なものへと高めていることがうかがえた。その活動の中で「生きがい」を見出すことによって、卓球クラブの活動は「生涯スポーツ」として意味をもつようになる。ここに研究目的であった「生涯スポーツ」の独自の意義を見出すことができる。

(指導担当 佐々木)

植田 輝

「人間が授かりし感性は今 五感育成をめぐる実践と課題」

私たちは今、モノや金、生活面では豊かになった。しかし、物質的に満たされる一方で、人は本当に豊かになったと言えるのだろうか。その疑問が本研究をするに至った動機である。原因のひとつに、鋭い感性がなかなか育ちにくいという環境があるのではないか。研究を進めるにつれ、感性と五感との関係性がみえてきた。

本研究では、まず第一部として、五感の感覚ごと(触覚、聴覚、味覚、嗅覚、視覚)に私たち五感の危機的状況に関する議論を整理した。つづく第二部では、五感育成のための実践として、近年、注目されている「ピオトープ」および博物館における事業といった異なるタイプの事例を取り上げ、分析・考察をした。実践において評価すべき点も多くある一方で、その場(特別な空間)で終わっている。また、実践の蓄積はされているかであるとか、支援者の教育的専門性は発揮されているかなどの課題もみえてきた。

自分の五感を使って"生きる"ということを軽視してきたことで、私たちは"自己を肯定する力"を失ってはいないか。五感を統合し、使って生きることは、価値あるものに気づく"感性"を磨くことにつながる。人間が授かりし感性、すなわち自分にしか感じとれない唯一無二のものを磨くことで、本当の豊かさが得られるのかもしれない。

(指導担当 佐々木)

上西 賢

「遊びの中のコミュニケーションに関する社会史的考察」

本研究では、今日、子どもの育成の観点から見直されている昔遊びを題材に文献の分析やアンケート調査を実施し、コミュニケーションを養う教育として行われる昔遊びに内在する問題点を明らかにすることを目的とした。考察にあたっては、集めたデータを「仲間集団」「ケンカ」「創意工夫」の側面で整理し、遊びに見られるコミュニケーションの特徴を昭和はじめからの社会状況の変化と関連づけて再考する事に留意した。

少子化などで社会が変化することにより、仲間集団の規模や属性、ケンカの仕方には変化がみられる。社会が便利になるほど創意工夫の余地が小さくなることから、他者との関わりの必要性を感じられない子どもたちのコミュニケーションは遊びの中でも確実に希薄なものとなっていることがわかった。遊びの中のコミュニケーションの特徴は子どもと社会の関わりの中で変化している。こうした状況の中で、コミュニケーション能力を養うために昔遊びを取り入れるには、過去の遊びを大人たちがなつかしさを感じながら、そのまま現在の子どものにやらせるだけでは不十分で、子どもをとりまく現在の社会の背景をふまえて昔遊びをアレンジしていく必要がある。

(指導担当 佐々木)

奥野 佑太郎

「フィンランドから学ぶ教育への取り組み～こどもの学習力・自立力を考慮した教育を探る」

この論文はOECDの実施したPISA（生徒の学習到達度調査）で上位にあるフィンランドの教育制度やシステム、教員養成や授業の実際を考察し、日本でも同様の制度を取り入れることができるかどうか、教師としてこどもの学習力を伸ばしていくのにどんなことを心がけなければいけないかを模索したものである。外国から教育について学び、自国の教育のあり方を学ぶという手法は自国の考え方に縛られている状況を打破するのに効果的であるが、思想や制度の状況によって必ずしも取り入れることができるものではない。そのためフィンランドがどういう国であるのかという点についても本論文では述べている。フィンランドの教育について述べた上でどんなことを教育現場で心がけなければならないかを考える。本論文ではフィンランドを通して教育の可能性について考え、こどもの学習力を向上させるにはどうすれば良いかを考えることを主題とする。

(指導担当 岡田)

包清教士

「労働形態に関する学習機会の考察 ワークシェアリングの場合」

日本の企業の新規採用は、学卒した者を大量に雇用し正規社員として育成してきた。それが、伝統となっている為、何かしらの理由で一度離職して再雇用を望む者や非正規雇用から正規雇用への道を望む者にとって正規社員での中途入社は難しい。そして、その者達はこの現実に対して諦めて非正規への道を歩もうとしており、またその数は年々増加傾向にある。人間は人生の様々な場面で「学習」せねばならない状況に陥るが、それには時間や費用等が負担としてのしかかる。正規と非正規ではこの負担に差が出ており、全ての人間に平等に学習機会が与えられない。この状況を打破する手段として私はオランダのワークシェアリングに焦点を当てて、研究をした。

第1章では、ワークシェアリングの内容について調べた。

第2章では、日本の労働環境の条件を中心に述べながら、問題点を指摘した。

第3章では、かつて、ワークシェアリングが話題になった時の人々の意見や近年の社会人が抱える不安点を白書から取り上げたりして、現状と課題を述べた。

現在、世界規模で景気が悪化し、雇用が不安定な非正規の労働者を中心に解雇が実行されている。そのような中で再びワークシェアリングが唱えられているが、以前のように一時的な気休めで終えないようにする為には、自分達の意味を社会に反映させようとする気概が必要でないかと思うようになった。

(指導担当 石飛)

國貞 俊介

「個性化教育に関する研究 オルタナティブ教育を中心として」

本研究は、我が国の教育の今日の問題とされている「人間力」低下の原因の一つとして個性喪失を問題として取り上げるものである。個性尊重の教育を実施しているオルタナティブスクールで行われている教育について研究することで、オルタナティブスクールの実態やオルタナティブ教育の現状について把握し、特に個性化教育に視点をあてて、オルタナティブ教育の社会的役割・意義について考察していく。

研究を進めるにつれ、オルタナティブスクールの現状はまだまだ世の中に浸透されていないことがわかった。教育カリキュラムと、多様なニーズを求める保護者の意見が異なることが学校教育の不平・不満の増長とされ、個性を大切にす、個性化・個別化教育への社会的な動きは必然である。テストをしない、成績表をつけないオルタナティブスクール出身の子どもが進学の際に進学先の判断材料不足が課題ではあるが、オルタナティブ教育の社会的な役割・意義は、学校不適応者の受け皿として成り立っているのが現状であった。

(指導担当 今西)

権谷 匠

「天理高校第二部における信条教育の教育的意義について」

天理高等学校第二部は、宗教法人天理大学の学校教育の理念である「信条教育」が行われており、このような生活環境や学習環境のもとで四年間の高校生活を送ることは、一般の全日制高校とは異なった教育的効果があると考えられ、特色ある高校として位置づけられる。天理高等学校第二部のような形態の学校が、現代の教育制度においてどのような存在意義を持つのか、その学習環境が生徒の人間の成長にどれだけ寄与出来るのかなどを考察することを目的としたのが本研究である。

二部での信条教育の実践として、天理教を通しての節目の出来事や学校行事後など、作文を書くことにより、これまでの自分を振り返り、普段はあまり口には出来ない感謝の気持ちや、今までは些細に感じていたことが今では大きな喜びへと変化しており、本当の自分の素直な気持ちが作文に現れていた。それは、信条教育というものが目に見えない心の教育であり、生活を通じて体得するものだと考えられるからであった。しかし、これから少子化傾向が続いていく中で、信条教育に基づいて、日中のひのきしんをしながら学ぶ二部の教育方針を維持していくことは容易ではないと感じた。勤務、学業加えて寮生活や部活動を並行させて、やり遂げていくことは肉体的にも、精神的にも決して楽なことではない。さらに、校則も厳しいため、ともすれば現在の一般の定時制高校のニーズに逆行しているとも考えられるが、このことと二部を単純に比較することは、非常に困難な問題であり、これからの一番の課題となった。

(指導担当 今西)

柴山 祐子

「手紙」という自己表現 - 絵手紙からのアプローチ - 」

本研究では、「絵手紙」という創作活動に着目し、その特性と、創作活動が人々にもたらす効果を追った。研究動機は、手紙という伝達手段の特性である「手間が掛かる」「伝達手段の他に、作品としての側面を有している可能性がある」という点に注目してみたいと考えたからである。

文献の研究、教室でのインタビューを行った結果、当初の予想通り、絵手紙は「芸術作品」としての特性を有しており、またこれを書くことで「心にゆとりができた」「自分の成長を感じる」といった、生涯学習的な一面を見出すことができた。しかしその半面、やや描き手主体の一方的なコミュニケーションである性質が強いことや、メッセージが「作品」と化している点、画風や作風などがほぼ同じもので統一されており、少し狭苦しい印象を受けるなど、手放して称賛できない部分も多いと感じた。これらのマイナス点をプラスに転向していくことで、絵手紙には、まだまだ開拓する余地があると感じている。

(指導担当 石飛)

高田 珠美

「日本の学校教育におけるサービス・ラーニング導入についての考察」

近年、学習意欲や学力の低下が問題視され、また学ぶことや働くことから逃げ地域社会で他者との連帯感をうまくつくることのできない人々が増加しているという中で、自分自身や地域社会の様々なニーズや問題に対応していくためには学校教育でのボランティア学習が効果的ではないかと考えた。そこで本研究は、全米で制度化され学校教育において義務化しつつある、地域社会へのサービス活動と教科学習を関連させた「サービス・ラーニング」について、日本の教育にも取り入れ活用することを目的として文献研究を中心に考察を進めた。

日本では奉仕活動・体験活動が推進されているが、教育現場ではサービス・ラーニングについてまだあまり知られておらず、ボランティア学習への意識や取り組みでさえ進んでいない現状が見られ、まだまだこれから推進されるべき課題であると感じた。学校教育での子どもたちの体験的な活動を、少しずつであっても地域社会のニーズに応えた奉仕活動と教科学習とを関連させた活動として行うことで、今後さらに自発的なボランティア活動への取り組みが促進されるきっかけとなるのではないだろうか。

(指導担当 今西)

林 陽一朗

「わが国の学校教育制度の一考察～完全学校週5日制の必要性について～」

本研究は、筆者自身が直に体験してきた完全学校週5日制の必要性について考察したものである。この制度は「ゆとりどころか生活が忙しくなった」「学力が低下している」などといった批判をテレビや雑誌でよく目にする。

この制度が、教育に悪影響ばかりををもたらしているのかという疑問を持ち、第一章では、完全学校週5日制に至るまでの経緯・背景、問題点について調べた。5日制は、表向きは、子どもたちにゆとりを持たせるためであったが、教師の労働時間短縮や、崩壊したバブル経済の浮場を目的としていた。また、問題点として、学力低下や部活動の時間がなくなるなど、8つの問題点を取り上げた。それらの問題点を明らかにするために、第二章では、天理大学生102人を対象にアンケート調査を行なった。第三章での調査の結果として、土曜日を部活動に専念したり、友人と過ごしたりと有意義に過ごしており、学力が下がったと感じている人は少ないということがわかった。しかし、家族と過ごしたり地域活動に参加したりしている人は少なく、今後の課題も明らかになった。今回の調査では、土曜日の休みに満足し、自分の求める活動に勤しむ人たちが多く、完全学校週5日制の必要性が明確となった。

(指導担当 今西)

東田 和也

「生涯スポーツに求められるもの - バドミントンの新ルールから考える - 」

バドミントン競技は2006年に新ルールへと変更され、21点ラリーポイント制となり競技にかかわる人達へ大きな影響を与えた。この変更と結びつけることとなる、岸一弘氏の論文「バドミントンの楽しみ方 - 生涯スポーツ論からみた4分類の検討 - 」がある。バドミントンを楽しむために、「行う」、「みる」、「支える」、「企画」の視点から捉えられている。生涯スポーツは、人生においてスポーツをすることに、重点が置かれている印象を受けた。そこで行うスポーツ以外の視点の重要性と、バドミントン競技のラリーポイント制が与える影響とを結びつけることを考えた。

21点ラリーポイント制となったバドミントン競技は、その競技性が変わり、みる側が楽しめるスポーツ競技となったといえる。バドミントンの新ルールへの変更は、競技にかかわる人達の影響により、人気スポーツとなるきっかけをつくったと考えられる。

(指導担当 岡田)

廣 始

「ファッション誌からみる現代の日本女性」

ファッションは時代を写す鏡である。そのファッションを通して、現代の日本人女性(20歳前後)の欲求や憧れを見つけたいと考え、タイプの異なるとされる4誌の女性ファッション誌を分析した。普段、私たちは服を着て生活する。その服を選択するにあたり、参考にされるものの一つとしてファッション誌が挙げられる。今回の研究では、『Cam Can』、『Zipper』、『non-no』、『GINZA』の4誌の2008年を1年分を集めて分析した。分析内容は、金額に関する比較、ファッションページ以外に関する比較、ルックスの比較である。分析の結果、4誌それぞれが持っているイメージ、金額の差が見えてきた。ファッションを自分を満足させるためのものとして身にまとう人、周りや異性に好感を持たれやすいものを身にまとう人との違い、同じ年代の中での普段の生活の違いを発見することができた。現代の女性を何か一つのものでまとめてしまうことは難しいことのように感じる。その人のファッションを見ることで、その人の理想や欲求の特徴を一部ではあるが見ることができるといえるだろう。

(指導担当 石飛)

宝地 暢明

「「書くこと」の教育効果に関する考察」

「書くこと」の教育効果をテーマにしたのは、自分自身、書くことが苦手で、正直なところ、なぜ卒論を書くのかよく分からなかったということがあったからだ。だからこそ、大学ラグビー部の活動について自分の考えをまとめた「ラグビーノート」と、高校・大学時代のラグビーへの取り組みをふりかえった「自分史」を作成し、書くことの意味を確かめたいと考えた。

実際にやってみると、今までやってきた「ラグビー」の経験を題材にしたらずら書けたことに自分でもビックリした。人は濃い時間の中ですごしていた経験はとても印象深くて全然忘れない。最初は自分のことを書くことに対してすごい恥ずかしさがあったが、何回か書いていくにつれて恥ずかしい気持ちより懐かしい気持ちが強くなっていった。人は言葉で表現すると恥ずかしい気持ちが出てしまって、素直になれなかったりするけど、文字で文章にして表現したら自分の気持ちと向き合えてすごく素直に表現できるんじゃないかと思った。

(指導担当 佐々木)

前口 沙登子

「音楽を生かした学習プログラムの開発」

私たちの周りには多くの音楽があふれている。しかし、社会教育の現場では、音楽を取り入れたプログラムはまだまだ少ない傾向にある。そこで私は、「音楽」と「学習プログラム」という2つのキーワードを柱にし、文献研究を中心に、今までにない違った観点から「音楽」を生かした「学習プログラム」の開発へつなげられないだろうかと考え、研究を進めた。

本研究の成果については大きく2点にまとめることができる。ひとつは、「音楽を生かした学習プログラム」を思案する上で、音楽の特質である言葉では伝わらない何かが伝わる喜びを味わうということをねらいに据えることの重要性である。もうひとつは、その要素を学習プログラムに加える際には、発表する場をもうける、仲間意識や信頼関係を築かせるようなプログラムを事前にいれる、参加者の不安要素を取り除く、といった具体的なポイントがあることである。

音楽というツールを今までにないような色々な視点からみるのが、今後の研究課題であると感じている。

(担当指導 佐々木)

万年 拓美

「野外活動が生む子どものちから」

筆者は現在、奈良 YMCA で子どもたちを対象にした野外活動で、ボランティアリーダーとして取り組んでいる。本研究は野外活動に焦点を当てて、野外活動という教育機会が子どもたちに与える学力を研究し、今後、野外活動に対してどのような取り組みをしていくべきかを述べたものである。

野外活動は、社会性、自然環境、問題解決能力といった、まさに生きていく上で貴重な力を与えてくれる。これらの教育の成果を上げるためには、指導者育成の強化、プログラムの柔軟性、長期キャンプに取り組むことが課題であることは明らかである。

では今後どのような教育に取り組むべきか。それは自分たちの将来について、自分で考え、先を見据える力を与えることを中心とした教育である。

野外活動は実際に経験し、自分の経験したことから学ぶことができる。野外活動の教育の方法をもっと理解し、活用することで、より子どもたちへの教育の幅が広がるのではないだろうか。

(指導担当 今西)

森 年輝

「南あわじ市の生涯学習推進計画の研究」

筆者は大学3回生の時に、南あわじ市教育委員会事務局生涯学習文化振興課で社会教育実習をおこない、南あわじ市の生涯学習の現状や課題があることに気づき、南あわじ市の生涯学習について研究してみたいと思ったのである。そして、課題研究を通して、南あわじ市を生涯学習推進都市としてとらえることが、本研究のねらいである。

南あわじ市の現状と課題についてはインタビューを行った。その結果、南あわじ市で生涯学習を展開する上で、子どもから高齢者までの幅広い範囲を掌握することは困難である。そして、なにより予算不足で難しいのが現状である。地域や公民館の体制づくりの課題が重要であることが分かった。

南あわじ市に関わる特徴的な課題として研究を進めると伝統文化である芸術・文化活動に人形浄瑠璃の後継者問題がある。その取り組みとして淡路人形座の座員の指導を得て、7団体の後継者グループがあり、淡路人形協会が後継者の伝承活動を進めている。

次に、南あわじ市の社会教育に代表的な実践にうずしお交遊塾があり、これに関わる課題がある。実行委員の人は参加児童への対応の多様さ柔軟さが必要である。また、子どもの気持ちを理解し、その上で、子ども一人一人の学びや気づきを促しながら、関わることのできる指導者の育成が今後の課題である。

生涯学習の進め方としてこれらすべてが、南あわじ市の生涯学習推進都市として捉えることができる。そして、南あわじ市が生涯学習を推進していくのに生涯学習計画を作り、市民と行政が協力して生涯学習を発信できる体制づくりが今後必要である。

(指導担当 今西)

山上 弘美

「男女共同参画社会と天理教の夫婦観」

大学に入ってから、天理教の教理に興味を持つようになり、天理教の授業を積極的に受講していた。その頃一般の社会の中での女性観と、天理教の女性観の違いについて疑問を持つようになり、男女共同参画社会と天理教の教理との関係性について調べた。

まず第一章では男女共同参画社会の現状と内容について、第二章では天理教の基本的な夫婦観について調べた。第三章では教会の方々にインタビューを行い、天理教信者の視点からの男女共同参画社会に対する意見を聞くことができた。第四章では先行研究とインタビュー結果を基に女性観の変容について述べた。

現代の天理教団には、教祖が女性は家庭に入るべきという教えを説いているわけではなくとも関わらず、一般の性別役割分業と同じ意識が見られた。教理と結びつけられて天理教の女性観・夫婦観は、時代情勢の影響を受けて重心が微妙に変化していることがわかった。

(指導担当 石飛)

吉岡 雄大

「公民館活動における地域支援」

本研究では、奈良市生涯学習財団南部公民館で行われている主催事業の活動の実際を調査するとともに、活動にかかわるボランティアスタッフに注目し、活動を通してのボランティアスタッフの学習を考察した。

南部公民館の主催事業「なんなん？おもしろ体験隊」では、地域の小学生を対象とした体験活動が行われ、毎回、趣向を凝らしたプログラムが組まれている。活動には多くのボランティアスタッフが参加し、運営を支えている。

ボランティアスタッフは、他のスタッフや子どもからの期待を感じたり、自身が活動の中に期待するものがあり、積極的な活動を継続させている。ボランティアスタッフが活動の中で、それぞれが自分の役割を果たし、連携することで、お互いを認め、尊重し合うことができる。スタッフとしての自覚を持って活動を進めていく事により、活動全体にスタッフ全員がお互いから学び合える環境ができ、そんな環境がボランティアスタッフを成長させる要因になると考える。

(指導担当 岡田)

世登 なみな

「現代成人の道徳性に関する試論的考察 -千葉県佐倉市の市民道徳意識調査をもとに-」

本論文では、千葉県佐倉市の佐倉市教育センターが行った市民道徳意識調査を引用し結果を読み取り、現状を捉えながら、成人の道徳性を見るアンケート内容に関する考察もふくめ、成人の持つ「道徳性」の具体的課題を研究した。

多くの人々は、地域とのつながりや家族との関係が変化し、コミュニケーションが少なくなり、人々が相互に理解する場が減ったということなどを理由に、地域の「道徳性」は悪くなってきたと意識し、大人自らの道徳性を高めていくことが必要と考えている。しかし、その核となる「道徳」そのものの理解や自らの信念の確立に至るまで思考できていないということが、佐倉市のアンケートからみえた、成人の道徳性の現状といえる。そのことから現代の大人の道徳性に関して必要なものは、一人ひとりが「道徳」とはどのようなものなのか、社会に暮らす人々とよりよく生きていくためには何が必要なのか、そのような問いかけを自分自身にし、主体性を持つ生き方を目指すことであり、大人の「道徳性」を高めていくためには、個人の主体性を重要視していくことが必要な課題であると感じた。

(指導担当 岡田)